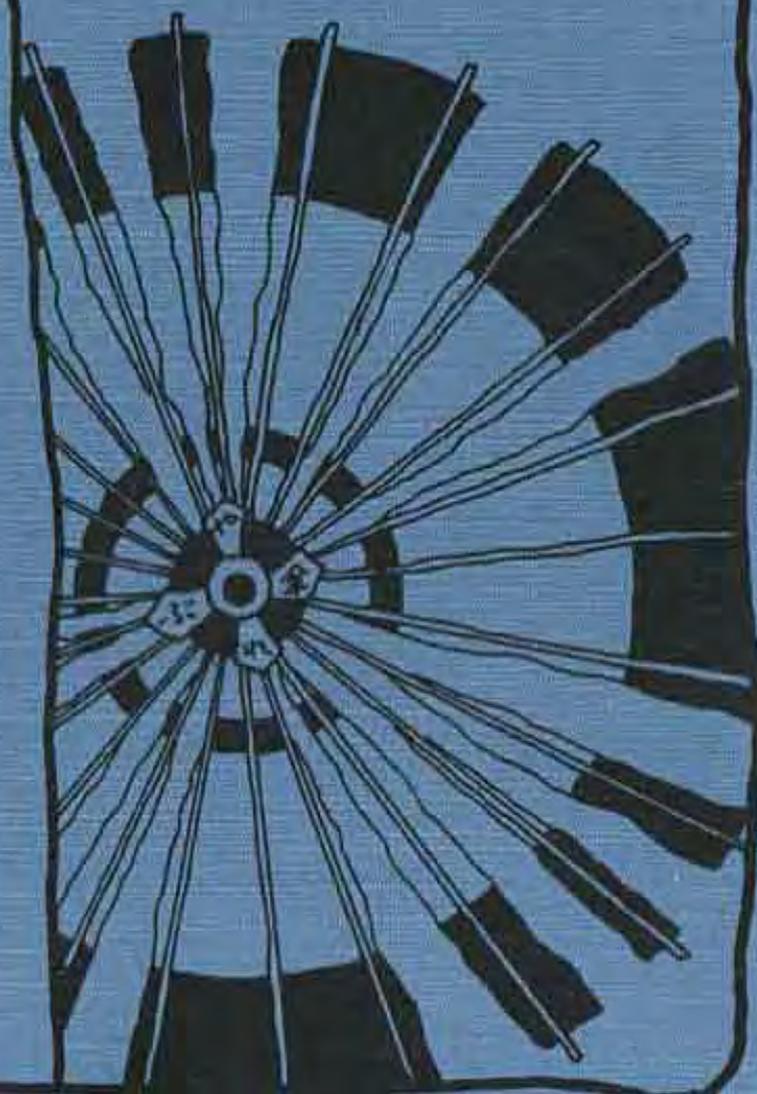


やぶれ傘



九十一号

一〇一六年八月

舟虫のものとところに戻りある	根橋空夜
トタン葺き納屋に雨降る紅蜀葵	大島英昭
夜怪のかたまつてゐる窓の外	きくちきみえ
フアド終わりたり扇風機回る音	藤井美晴
老鶯のこゑを近くに避雷小屋	廣瀬雅男
あぢさゐの花つけぬ茎切つて晴れ	丑久保 融
鈴掛の落葉踏みくる乳母車	瀧島新望
網の大鳥居より登山道	青谷小枝
畑中へホースのひかれ茄子の花	腹道孝彦
柿の木の下蔭を行く藪	白石正明
大雨にならずに夏の日は暮れて	小山陽子
見え隠れして溶岩原の夏帽子	野池洋子
突堤に撒餌ひからぶ夏の雲	秋山信行
革張りの本の指あと雲びにけり	安藤久美子
走馬灯しきりに犬の吠えてをり	有賀昌子

抄 集 句 傘 れ ぶ や
選 夫 紀 崎 大

戦前の香りの館百日紅	久世孝雄
目をつむり腹這ひの犬はたした神	天野美登里
片陰にあふるる人や赤信琴	松村光典
藤椅子に深々と腰掛けにけり	村田 武
鉢植糸の虫袋が店先に	森美佐子
休日のブルドーザーに大西日	藤本 実
カウンターに夫々が置く夏帽子	泉 一九
子が離いで賑はふパン屋花サボテン	岩藤礼子
髪のをを明るく染めし夏始め	岡田香緒里
万延の文字薄れたる幕洗ふ	亀岡睦子
三人の寝息こもこも明易し	菊地葉子
木苺を摘むや高架を新幹線	齋藤朋子
香合は神代杉や夏座敷	貫井照子
4Bの鉛筆で描く初夏の山	野口希代志
昭和四年定価紙面の書を曝す	橋本美代

夏の日

小山陽子

梅雨寒や膝を曲げればみしみしと
梅雨曇り池にぷかりと亀浮かぶ
シャツのタグちくちくとする溽暑かな
夏の夕座る煉瓦にある微熱
大雨にならずに夏の日は暮れて
夏の夜のベッドの奥にバネの音
野良猫の網戸を開けて入りくる
夏の日の当たる窓辺で昼餉かな
横丁は片陰ばかり混んでゐる
日盛や小屋の兎は目を閉ぢて

夏帽子

菊池洋子

写楽の絵染めて蕎麦屋の夏のれん
見え隠れして溶岩原の夏帽子
その先は急流となりあめんぼう
路面電車ぐいと曲がりて濃あぢさゐ
じやがいもの花咲く丘に日の差して
三叉路の道のひとつに蛇の衣
一筋に水脈ひいてくる蛇の首
よその子に手をにぎられて夜店の灯
鰐口を打ち損じたる梅雨晴間
おほまかに盛られて磯の夏料理

蚕 豆

秋山信行

手水鉢に竹の葉うかぶ夕薄暑
船影の小さくなりゆく心太
蚕豆の莢は袋に実は旅に
水荒く車を洗ふ夏はじめ
突堤に撒餌ひからぶ夏の雲
祭足袋代り番この役のきて
村雨を子等の駆けゆく麦の秋
父の背に泳ぎし川や夏あざみ
旅立ちは雨の日となり合歡の花
捨てし菜に西日さしくる畑仕舞

螢の夜

安藤久美子

アカシアの花ざわざわとふさふさと
山道は急に険しくえごの花
花石榴この坂道はゆき止まり
岩肌を飛ぶを押さへて夏帽子
夏雲や丁石続く恐山
革張りの本の指あと黴びにけり
夜の雲梔子の香はベランダに
光りつつ水含みゆく水中花
水音へ手を差し伸ぶる螢の夜
行々子川は漣ばかりなり

走馬灯

有賀昌子

滴りや下書き消してまた書いて
土曜日耳鼻咽喉科柿若葉
走馬灯しきりに犬の吠えてをり
半夏生草古りし社に紙垂の揺れ
ぶな林に木洩れ日揺るる蟬時雨
郭公のこゑ聞き卵かけご飯
風知草鉢は床几に置かれけり
遠花火特許事務所は十七階
子供祭り笹舟の浮く手水鉢
夏料理せせらぎのこゑ聞きながら

百日紅

久世孝雄

公園の暗き道筋しやがの花
梅雨晴間交りの雀地に転げ
収穫の玉葱の粒揃ひをり
紫陽花に古き裏木戸華やげり
艶やかにひたすら空へ今年竹
八の字にくぐり抜けたり大茅の輪
合歓咲けり元荒川の夕間暮れ
高齢の免許更新梅雨曇り
今日こそは草を引かねば諸畑
戦前の香りの館百日紅

はたたた神

天野美登里

夜濯ぎのタオルは竿をいつぱいに
夏ゆけり食卓に置く週刊誌
目をつむり腹這ひの犬はたたた神
梔子の花の暮れゆくにほひかな
尺八の音のずれ来る夕端居
銃眼の先の海暮れ蚊喰鳥
対州の夜は深けてゆく夏の鹿
青柿や畑の道に水溜り
病葉や石のベンチに日はあたり
夏萩のこぼれてゐたるをんな坂

春
蟬

松村光典

春蟬のあちこちに鳴く八ヶ岳
老いし友集ひて励むわらびとり
棘バラに出入りするたびとがめらる
富士見えぬ東海道や梅雨の空
あんどりと大輪の百合開きけり
青空に筋雲ひとつ梅雨明ける
片陰にあふるる人や赤信号
蠅の穴日に日に増える木の根元
つるつるの頭をすべる汗のすぢ
夕蟬のこゑを聴きつつバスを待つ

十葉の抜きしが生える強さかな
 遅々として治癒せぬ腕や明けぬ梅雨
 団子虫をふとかまひけり梅雨の朝
 父の日の夫饒舌になりけり
 空き家らしき庭に咲きたる夾竹桃
 気だるさうに聞こえ来るかな朝の蟬
 園児らの願ひさまざま星祭

本郷美代子

番屋まで萱草の道続きけり
 雲垂る朝の漁港に海猫の声
 築堤の杭打つ音や初夏の浜
 赤煉瓦庁舎の庭に針はりえんじゆ槐
 駅前なすに玫瑰はま咲いて汐の風
 洞爺湖を走る舟より揚花火
 都市對抗野球応援団扇振る

本田 武

増田みな子

アカシアの花咲く道は通学路
川沿ひを犬に引かると花水木
初夏の海鳴り近き露天風呂
若葉風グラウンドゴルフ競ひ合ふ
SLの汽笛聞こゆる麦の秋
雲流るる遠き山並麦青む
球児等の掛け声渡る青葉風

松本善一

葉桜の下魚影濃き神田川
菖蒲葺く飲んべ小路の低き軒
空豆を食べ三つ指に皮残す
中天に大きき火星や梅雨間近
児等今日は課外授業の麦刈りに
さざ波や植田に映る貨車の列
くだくだと身の上話麻のれん